要旨

ミクロロギーと普遍史――ベンヤミンの歴史哲学

宇和川雄

ベンヤミンの歴史哲学が特異な「ミクロロギー的方法」にもとづくものであることは、アドルノをはじめとする友人たちによって早くから指摘されてきた。「ミクロロギー」とはそもそも 19 世紀の時点では学問における行き過ぎた些事拘泥を諫めるための言葉だったが、アドルノはそれをベンヤミンの哲学に固有の反体系性・断片性を表すためのキーワードとして使っている。ベンヤミンにおいてこの方法は、第一次世界大戦後のドイツで生じた体系哲学からの脱出の試みのひとつの戦略として選び取られたものだったが、アドルノはしかしこの方法がどのような思想史的伝統および同時代言説のなかで形成されたものであるのか、ほとんど説明していない。ミクロロギー的方法にもとづくベンヤミンの歴史哲学は、今日では巨視的な歴史哲学に対抗する「ミクロストリア」の先駆として評価されているが、その諸テーゼが十分に解明されているとは言い難い。本論文ではまず、これまでもっぱらベンヤミンに固有の「感覚」として論じられてきたミクロロギー的方法の形成過程をたどり、「境界事例」に焦点をあてるベンヤミンの歴史哲学の方法の再検証を試みる（第一章～第三章）。もっとも、ベンヤミンの歴史哲学のテーマは多岐にわたり、学生時代からはじまるその省察の範囲は必ずしもミクロロギーの枠におさまるものではない。例えば、歴史を自然のように眺める視座、歴史が恒常的な破局であるという考え方、そして技術による自然支配と進歩の幻想に対する批判（第四章）。そこにはさらに、ミクロロギー的方法とは一見相容れない「普遍史」の理念さえもが含まれている。ミクロロギーにもとづくベンヤミンの「個物の救済」の思想のなかから、「普遍史のメシア的な理念」がどのように派生してくるのか。その謎を明らかにすることが、本論文の最終章の主題である（第五章）。

ベンヤミンの歴史哲学の集大成となるはずだった『パサージュ論』は未完に終わった。しかしベンヤミンの歴史哲学の痕跡はさまざまなテクストのなかに残されている。例えば、ベンヤミンが生前に刊行した数少ない本のひとつに『ドイツの人々』という書簡集がある。これは 18 世紀後半から 19 世紀後半までのドイツの人々の手紙をまとめた書簡集であり、1936 年に中立国スイスの出版社から刊行された。この本をナチズムの手に

よるドイツ精神の荒廃に対する異議申し立ての試みと評したのはアドルノだが、ベンヤミンにはそれとは別にもうひとつ、ゲオルゲ・クライスとの対決という狙いがあった。ゲオルゲ・クライスは当時のドイツで勢力をもっていた詩人サークルであり、ベンヤミンは共感と反感を交えつつ、このサークルから生涯にわたり大きな影響を受けていた。ベンヤミンによれば、この書簡集の狙いはゲオルゲ・クライスが探す「秘密のドイツ」とは別の、「隠蔽されたドイツ」の相貌を明らかにすることにあった。ベンヤミンがその際に詩や戯曲ではなく「手紙」という形式を取りあげたのは、それがゲオルゲ・クライスの文学理論――とくにフリードリヒ・グンドルフの文学理論――のなかで周辺的に扱われてきた資料だからである。ゲーテをはじめとするドイツ詩人の英雄列伝を叙述したグンドルフに対して、ベンヤミンはこの書簡集のなかでドイツから追放された詩人や思想家、およびその友人や恋人の手紙を意図的に選び、彼らの手紙のモンタージュによって、ドイツ古典主義の生成から衰退にいあるまでのイメージを浮かび上がらせようとした。それまで顧みられてこなかった些末な事象を取りあげ、モンタージュによって歴史の秘められたアクチュアルなイメージを開示するというベンヤミンの歴史哲学の方法は、ここにそのひとつの具体例を見出すことができるだろう。

第一章ではこの『ドイツの人々』の構想が、ベンヤミンのグンドルフ批判のなかからどのように派生してきたのかを考察する。ゲーテをドイツ文化の英雄および造形者と見なし、その造形力の本質である「ゲシュタルト」の解明を主題としたグンドルフの『ゲーテ』（1916 年）は、第一次世界大戦中のドイツでベストセラーになった。それに対してベンヤミンは数年後に書きあげた『ゲーテの親和力』（1922 年）のなかで、グンドルフの文学理論に対する全面的な批判を展開することになる。ベンヤミンによれば、グンドルフは不明瞭なゲーテの本質を前提とし、さらに歴史上の人物であるゲーテの生を神話的な生に歪曲するという二重の誤謬を犯している。ベンヤミンの批判の矛先は、グンドルフの文学理論（ゲシュタルト理論）の根幹を成す本質主義・全体論・ナショナリズムに向けられている。1930 年代の『ドイツの人々』の構想は、まさにこのグンドルフ批判の延長線上で生まれてきたものだった。この章では、ベンヤミンのミクロロギー的な文学・歴史の見方が、ゲオルゲ・クライスを代表する批評家であるグンドルフとの競合のなかでどのように練り上げられてきたのかを明らかにする。

第二章では、文献学者であることを自認していたベンヤミンが、文献学者の細部感覚を歴史研究にどのように応用したのかを考える。ベンヤミンは早くから歴史哲学の諸問

題に関心を抱いていたが、1910 年代のベンヤミンの著作のなかには、ミクロロギー的方法はまだはっきりとは現れていない。ミクロなものに拘るベンヤミンの視座は『ゲーテの親和力』以降のテクスト批評・文献学の実践のなかで培われたものであり、ベンヤミンがそれを新しい歴史研究の試金石と見なすようになるのはもっと後になってからのことである。ベンヤミンは 1933 年のエッセイのなかで、新しい歴史研究のモットーとして「些末なものへの畏敬心」を掲げている。この言葉はそもそもグリム兄弟の若き日の論文集『古ドイツの森』（第一巻 1813 年）に対して同時代人から寄せられた、些末な伝承を蒐集するグリム兄弟の仕事に対する批判の言葉だった。この言葉をめぐる評価が変わるのは、1860 年代のことである。ヴィルヘルム・シェーラーはグリム兄弟の「些末なものへの畏敬心」が、従来の美学で周辺的に扱われてきた古い伝承を蒐集する試みであったことを高く評価し、その蒐集の理念にもとづいて古代から近代にいたるまでのドイツ文学の全体を網羅する「普遍史研究」を確立した。それに対して、1930 年代にシェーラー学派の普遍史研究を批判し、グリムの「真の文献学の精神」への回帰を唱えたのがベンヤミンだった。ベンヤミンによれば、新しい歴史研究において重要になるのはもはや「偉大なる全体」や「包括的な連関」を見て取る眼差しではない。「些末なものへの畏敬心」、すなわちそれまで周辺的に扱われてきた「境界事例」に沈潜する精神こそが重要なのだ。ベンヤミンはこの新しい歴史研究の一例として、同時代のヴァールブルク学派とアロイス・リーグルの衣鉢を継ぐヴィーン美術史学派を挙げている。この章では、「些末なものへの畏敬心」という言葉の解釈がグリム兄弟の時代からベンヤミンにいたるまでどのように変わってきたのかを追跡し、ベンヤミンのミクロロギー的方法の思想史的位置づけを明らかにする。

第三章ではベンヤミンの原型論批判を取りあげる。1930 年代の半ば、ベンヤミンは『パサージュ論』を進めるうえでひとつの課題につきあたる。すなわち、パサージュをはじめとする 19 世紀の建築様式を資本主義社会の「集合的無意識」として分析する彼の試みが、カール・グスタフ・ユングやルートヴィヒ・クラーゲスの原型論とどのように区別されるのか。この点についてアドルノから指摘を受けたベンヤミンは、その後「太古的なイメージの理論家」との対決を明確に意識するようになる。ユングとクラーゲスの名が挙がっているが、ベンヤミンとの関係が深いのはクラーゲスの方である。ベンヤミンは学生時代からクラーゲスの思想に傾倒し、とくに 1922 年に刊行されベストセラーになった『宇宙生成的エロス』からは大きな影響を受けていた。現代を「精神」の支

配によって「魂」の失われてしまった不毛な時代と考えていたクラーゲスは、この本のなかで先史時代の人間の陶酔的・エロス的な意識状態の解明を試み、その答えとして「イメージの現実性」の理論を提唱した。このクラーゲスのイメージ論に対するベンヤミンの批判は、まとまったかたちでは残されていない。しかしその痕跡は、すでに 1930 年頃に書かれたいくつかのエッセイのなかに見出すことができる。例えば『写真小史』（1931 年）のなかで、ベンヤミンはクラーゲスが説くようなアウラ的な「イメージ」の経験が現代において衰退しつつあることを指摘したうえで、写真（複製技術）によって生み出される「模像」の非アウラ的経験の積極的な評価を試みている。アドルノによれば、ベンヤミンの歴史哲学のひとつの特徴は、それが「写真のスナップショット的経験」を明確に意識して構成されている点にある。この章では『写真小史』を手がかりに、クラーゲスとベンヤミンのイメージ論および歴史哲学の差異を明らかにする。

第四章では、ベンヤミンの技術論を進歩史観に対する批判として読み直す。ベンヤミンは 1930 年代後半に取り組んだエッセイ『技術的複製可能性の時代の芸術作品』のなかで、20 世紀の帝国主義戦争を「技術の反乱」と呼んでいる。ベンヤミンによれば、技術はいまやそれを生み出した人間の手を離れ、制御不能なものとして人間と対立している。技術を駆使した殲滅戦は、人間が技術と新しい関係を築くことができなかったことのひとつの現れなのだ。このままのやり方で技術を使い続けるならば、それはいずれまた大きな破局を引き起こすことになるだろう。ベンヤミンはしかし単純な技術否定にも盲目的な技術崇拝にも与さない。彼の関心は一貫して、人間と技術、社会と技術の関係の再構築に向けられている。この「技術の反乱」を考えるうえでベンヤミンが下敷きにしたのは、ジェルジ・ルカーチの物象化論だった。ルカーチは『小説の理論』（1916 年）と『歴史と階級意識』（1923 年）のなかで、人間がみずから生み出した文化や社会が、硬直したよそよそしい「第二の自然」になっているという事態のうちに、近代の「疎外」を見出していた。ベンヤミンは『技術的複製可能性の時代の芸術作品』のなかで、この「第二の自然」の概念を技術論へと転用している。すなわち、ベンヤミンは人間が〈第二の自然としての技術〉をもはやわがものにできていないという認識から出発して、この事態の克服を現代芸術の喫緊の課題として考えていた。ベンヤミンがそこで目指しているのは、ファシズムの「戦争の美学」に対抗する芸術の概念の構築である。ベンヤミンはさらに『歴史哲学テーゼ』（1940 年）のなかで、技術の進歩への頑なな信仰によって社会の進歩という幻想が紡ぎ出されてきたことに批判の矛先を向け、「進歩」に代

わる歴史の概念の構築に取り組んでいる。この章では、ベンヤミンがルカーチの「第二の自然」の概念で同時代の「技術化と疎外」の現象をどのように考察していたのかを明らかにし、ベンヤミンの技術論を進歩史観に対する反論として読み直す。

第五章では、ベンヤミンが進歩史観への批判と並行して模索していた歴史観の一例として、「普遍史のメシア的な理念」について考察する。「普遍史」とはそもそも聖書の記述にもとづいて人類史を解釈するキリスト教的歴史叙述の一形式であり、その伝統は古代ローマにまでさかのぼる。キリスト教的な「普遍史」から科学的な「世界史」への転換はドイツでは 18 世紀後半からはじまるが、「普遍史」という名称はその後もパノラマ的な歴史叙述の一形式として残り続ける。この 19 世紀後半に流行した普遍史研究をベンヤミンが批判し、それに対抗するために独自のミクロロギーの方法をつくりあげていったことは、すでに第二章で確認した。ベンヤミンは『歴史哲学テーゼ』のなかでふたたびこの 19 世紀的な普遍史の方法を批判しつつ、その一方で従来の普遍史とは異なる「普遍史のメシア的な理念」を思考する可能性に繰り返し言及している。ベンヤミンによれば、万人によって理解される普遍的な歴史は決して思考不可能なものではなく、その手がかりは「普遍言語」の理念のなかに求めることができる。あらゆる言語を内包し無限の発展可能性を秘めた言語形式についてのベンヤミンの考察は、すでに博士論文『ドイツロマン主義における芸術批評の概念』（1919 年）からはじまる。ベンヤミンはこの論文の隠れた主題として、初期フリードリヒ・シュレーゲルにおけるメシアニズム思想の解明に取り組んでいた。『アテネーウム』（1798 - 1800 年）時代のシュレーゲルは、一方では近代史の目標として「神の国」の実現を掲げ、他方では近代文学の理念が無限に拡大する「発展的な普遍詩」であることを主張していた。ベンヤミンはこの初期シュレーゲルにおける歴史哲学とポエジー論（言語哲学）の構造の二重性に注目し、「発展的な普遍詩」の理念のなかに書き込まれた歴史哲学の構造、すなわち「ロマン主義的メシアニズム」の構造を明らかにすることを試みている。その試みは博士論文のなかでは十分に展開されないままに終わったが、長い潜伏期間を経て、1940 年の『歴史哲学テーゼ』のなかでふたたび浮上してくる。ベンヤミンはシュレーゲルからおよそ一世紀の時を経て、万人によって理解される「普遍史」の理念を、「普遍言語」の理念にもとづいて再生しようとした。ベンヤミンの考える「普遍史」は、一部の民族、一部の階級、一部の国家、一部の人々にとって理解されるものではない。ベンヤミンによれば、「普遍史」とは万人によって理解される歴史であり、それはつまり「進歩」の物語のなかで

語られてこなかったすべてのもの、すなわち「抑圧されてきた者たち」が解放されたときにはじめて可能となる。ゆえにベンヤミンはそれを「人類の希望」を表すひとつの指標、あるいは「祝祭の言語」とも表現している。「普遍史」とはつまり、それまで周辺的に扱われてきたものに焦点をあてるベンヤミンのミクロロギー的方法、あるいは「個物の救済」の思想を人類史へと拡張し、極限まで突き詰めたものにほかならない。もっともそれはあくまでユートピア的な理念にとどまっていて、この普遍史の理念を具体的に叙述することができなかったところにベンヤミンの限界があった。しかしこのユートピア的な理念のなかには、シュレーゲルにおいて懐胎されながらその後忘れられていた言語哲学と歴史哲学の総合のひとつの試みを、そしてベンヤミンの「個物の救済」の思想のひとつの精華を見出すことができる。